

Jさんへ

半月が過ぎてやっと、あなたのことを語れるようになりました。初めてお会いしてからもう8年の付き合いになります。井谷先生の紹介でお宅を訪ねたとき、最初は疑い深くとっつきにくい印象を受けましたが、お話しするととても理知的で賢明な方だとわかりました。人をよく洞察していたのでしょう。信頼してくれるようになってからは色々なことを話してくれました。戦争に行った思い出、フィリピンとシンガポールの港の間を飛行機で物資を運んでいた折にはいつ追撃されるかと思ったなど、怖い思いをたくさんしたでしょうがそんなことは口にせず、穏やかに南の島の気候風土を語ってくれました。そう、いつも感情を表に出さず穏やかでした。そのためJさんの心情はあまり理解されなかったのだと思います。

一度だけ、とても悲しみ傷ついた顔を見ました。息子さんが亡くなったときでした。息子さんがテニスをしていたから、とテニス番組をいつも欠かさず観ていました。その息子さんが若くして亡くなったときの落胆は計り知れません。また同じ年に私の父も癌で亡くなっており、ひとつ違いの私の祖母とは「息子を亡くした」という共通の不遇で慰めあっていたと思います。あの日から、Jさんはがくりと力を落とされたような気がします。

博識で地理に詳しく、字もお上手で、おめでたい席では長唄を吟じてくれ、庭いじりもされ、どこかへ外出すると必ず皆にお土産を買ってくれました。色々な所に一緒に出かけたこと、窓辺の椅子に座って気持ちよさそうに外を眺めていた姿など忘れられません。

1年ほど前からあなたは頻繁に「死」について口にするようになりました。しんどいから、と外出を断るようになっていましたがこの1年は「最後かもしれないから」と積極的に外に出たがられ、春夏秋冬、風物を愛でともに季節を感じました。Jさんは美しい自然を愛し、命をいつくしんでいたと思います。庭に来る小鳥、花一本にも愛情を注いでいました。

言葉に出して喜怒哀楽を示さないため、みんな少し距離を置いていましたが、本当はとても寂しかったのではないかと思います。私の娘を見ると「大きくなったなあ」と目を細めていました。その向こうにご自身のひまごさんを重ねていたのでは、と今思います。「ものすごくしんどい」と訴えることが多くなり、足がもつれて転びそうになることが増えてきて、夜も苦しいと眠れない日が続き、ついに4月3日の深夜、「救急車を呼んでくれ」と訴えられました。我慢強いJさんが耐えかねた苦しさ、電話を受け付き添っていった救急病院で「重篤な肺炎」で心不全も進んでいる、改善の見込みはないといわれました。病院でJさんは「トイレに行きたい」と訴え、カテーテルを外して立ち上がろうとされ、ベッド柵をされて夜は睡眠剤を投与され、肺炎は良くなっても精神的な苦痛により、いらだった怒りと不信の目をされていました。「ともの家に帰る」。家族と本人の意思で、終末期を奥様のいる吾も紅で送ることにしました。

退院されてきた日に、食後のコーヒーを出す時「ああ、美味しい」とにっこりしゆっくりと味わっておられました。「病院ではこんなこと無かったから」と娘さんも言われていました。若い頃から自分で何でも決めてそのとおりに行って来た、誇り高いJさんは、思いを無視されることを嫌っていました。最後まで排泄はトイレで、食事は自分で。それがJさんのプライドだったと思います。吾も紅に戻り、体力が落ちて車椅子で移動するようになっても力をふりしぼってトイレに立ち、麻痺した右手の代わりに左手でスプーンを持って食べていました。戻ってからはしばらくすると食事の量も増え、「普通のご飯が食

べたい」とミキサ一食とおかゆをやめ、普通食になりました。5月、96歳の誕生会では立ち上がって挨拶され、ビールを飲みケーキを召し上がって、訪ねてきた祖母から花束を受け取って、とても嬉しそうな表情をされていました。「会いたい人はいますか」と尋ねると「妹」といわれ、妹さんと甥夫妻の訪問を受け、本家の親戚にも会われました。しかし、30分ほど話すと息が上がり、お疲れの様子でした。夜は不安との戦いでした。日が高いうちは、気丈に平静を保っていられても、暗くなると苦しさや恐怖が襲ってくるのでしょうか。5分、10分ごとに起き上がって人を呼び、必死で助けを求められていました。私たちは、それに付き合うことしかできませんでした。

しかし、日中は散歩に行ったりレクをしたり、皆さんの輪の中で過ごしました。散歩では、Jさんのなじみの場所を回りました。「この店で毎年子どもたちにみかんを送っていた」など、思い出を語ってくださいました。「みなさん、どうもありがとうございます！」とかすれる声で折に触れ、きちんと挨拶されていたのも律儀なJさんらしさでした。つねに『さよなら』を心に用意していたと思います。

最後の外出は、うどん屋でした。奥様と並んでとても嬉しそうにうどんや天むすをほおぼっておられました。その次の日からぐりと食が落ち、トイレでも座位がとりにくくなって、3日後に息を引き取られました。

その日の昼過ぎ、井谷先生に挨拶され、14時に私を呼ばれました。ずっと手を握りながら、「ありがとうありがとう」と繰り返され、「いい人生じゃった、いい出会いじゃった、ありがとう」と言われました。酸素マスクを外してくれ、といわれたのも話したかったためと、最期の苦しみから逃れるためだったと思います。その瞬間まで、自分の意思を明確にされていました。「井谷先生にも、くれぐれもよろしく伝えてくれ」というのと、「ももとあい、いい名前、いい子ができた」というのが遺言でした。私の介護人生の中で、はっきりと自分の思いを告げて亡くなったケースは初めてでした。生き様は死に様、といいますが、Jさんらしい最期だったと思います。ののしるでも、恨み節をくべるでもなく、ただひたすら人への感謝を述べて旅立たれた、高潔な人生でした。それゆえに残された私たちの悲しみは深く、心には大きな穴が開いています。Jさん、こちらこそありがとうございます。「よかった」と言って貰えた出会いを無駄にせず、これからもあなたを思いだして生きていきたいと思っています。

永和 里佳子

